

卒業研究題目 私とラグビーフットボール

英文題目 Spirits of Rugby Football

1K03A135-6 氏名 種本 直人

指導教員 主査 宝田 雄大 先生 副査 石井 昌幸 先生

私は小学校1年生の時からずっとラグビーフットボール（以下ラグビーという）に関わってきたので、人生の、と言ってもまだ22歳であるが、人生の3分の2以上の期間においてプレーしてきたことになる。だからラグビーは私の人生そのものと言ってよい。振り返ると、ラグビーを始めたきっかけにおいても、ラグビーを続けることができたのも、そこには様々な方々の深い愛情があった。私がラグビーについて何か語るとき、その方々の愛情を抜きには決して語れない。したがって、本論はやや散文的にならざるを得ない。散文的にならざるを得ないけれども、ラグビーの楕円球の不規則なバウンドはしばしば人生に例えられることを考えるとき、人生において深く人から愛情を受け、深く人を愛さなければラグビーの本質は極めることはできないのではないかと思う。ボールを落とす反則、いわゆるノックオンはボールを落としたプレーヤーに批判が向きがちであるが、反対にパスを送った方のプレーヤーにもっと愛情を持ったパスをしろと表現することさえしばしばある。オールフォアワン、ワンフォアオールとはいふ古されたフレーズであるが、私が思うにフィールドにおいて15人で展開するラグビーは人生の縮図なのではないか。人は1人では生きてはいけない。1人では決してトライは出来ない。15人がそれぞれ100パーセント以上の力を発揮すれば、しばしば戦前の予想をひっくり返す試合もある。タックルはたやすいことではない。しかし1人のプレーヤーがすべきタックルを怠ると他の14人に迷惑をかけることになる。楽しんでプレーをする余裕もプレーヤーには必要であるが、勝ち負けに拘らない緩慢なプレーは、プレーヤーはもとより観客にも感動を与えることは決してできない。人に感動を与えることが可能なラグビーであるならば、是非そうしようではないか。愛情をグランド一杯に展開しようではないか。私のラグビー人生での「愛情の展開」の力の源泉となり、支えてくださった人々について感謝の気持ちを捧げながら第2章で記したい。

以上の論点が大切な事柄ではあるがそのことは第2章とする。その理由はこうである。愛情や緩慢で展開される人間社会の縮図と捉えたフィールドは、フィールドの上空から大きな目で俯瞰してみると、実はオンサイド側が私たち現世の人間が繰り広げる場所であり、オフサイド側は、神の領域と私は捉えるのである。したがって「愛情の展開」よりも先に論じておきたいのである。オンサイド側では、愛情、勇気、知恵、力、工夫、友情、信頼といった人間のあらゆるプラスの能力を出し合って、オフサイド側のフィールド部分を少しでも縮めるスポーツであると解釈したい。だから、「オフサイド」という反則は、工夫も知恵も勇気もない行為であるため神は許されない。私は、そのようにフィールドを分割して考え、神と人間の関係についてラグビーを通じて考えたい。第1章で詳しく述べたいと思う。

第3章では、私の愛するラグビーについて、それを取り巻く環境について論じたい。もっといろいろな人にラグビーをプレーしてもらいたいし、もっといろいろな人にラグビーを見てもらいたい。ラグビーの発展を願いつつ論じたい。ラグビー人気のピークは25年も前であろうか。今より圧倒的にテレビ、新聞等で露出されていた。人気が先か、マスコミの露出度が先か、鶏とたまごの関係のようである。ラグビーは最もアマチュアリズムを尊ぶスポーツの1つであるが、これに固執しても全てに工夫がなくなり保守化してしまうことが心配である。行政改革ではないが、日本ラグビーフットボール協会が先頭となって民間の知恵の導入、模倣も視野に入れる余地は多いにあるだろう。観客であるたくさんの親子が、暖かい、ほのぼのとした気持ちでラグビー場からの帰路についてもらいたいのである。私が、かつてそうだったように。